I-44

図書館を介した高齢者と児童の居場所
介護と児童施設を複合した交流の仕方の再定義
A Gathering Place for Seniors and Children Through Libraries
Redefining Interaction Methods by Integrating Care and Children's Facilities

○横山晃己[1]，　江川香奈[2]
* Kouki Yokoyama[1] , Kana Egawa[2]

Abstract: In an ageing society, there is a growing need for opportunities where older people can play an active role not merely as recipients of welfare, but as contributors to society. Passing on their child-rearing experience and wealth of knowledge to the next generation provides older people with a sense of purpose and becomes a valuable asset for society as a whole. This design centers on creating “learning spaces” that support such exchanges, establishing an environment where older people can interact naturally with children and those raising families. It aims to form the basis of a new community through mutual learning and support across generations.

１．はじめに

高齢化社会の現代において、高齢者は介護される対象とされている.しかしながら,日常生活を通して多世代との交流を促進することで、高齢者自身の健康増進、および社会貢献に寄与することも考えられる。その活動の一環として子育ての経験の共有,多世代交流による学びが偶発的に発生し,高齢者が福祉の対象から社会の担い手へと役割を変える.ただ,福祉を受けなければ生活ができない人もいるのが事実として存在している.そうした中で福祉を受けること,社会貢献をすることの二つを同時に行うことができれば,世代を超えたつながりを生むことができる.そこで多世代が互いに助け合う新しいコミュニティを実現するための設計提案を考案した.

２．研究背景

近年図書館は社会的交流の場,学習の場として浸透している.また,それに伴い図書館の機能単体のみという図書館が少なくなっており,複数の機能を持ち合わせる図書館が増えてきている.交流,学習の場といっても,個人のスペース,団体のスペースと近しい年代の人との交流は生まれるが,離れた年代の人との交流する空間としての図書館はいまだ少なく,イベントを介して交流を形成するものが多い.このため本を読んで得る学びだけでなく、自然な交流によっても学びを得ることができる図書館の実現が期待される。また介護施設も児童施設も技術革新や社会のニーズに対応し,利用者の多様なニーズを満たすような設計が求められていると考えられる.さらに近年人々の暮らしの変化によりコミュニティがあることで育まれていた地域のかかわりが希薄になってきていることも課題として挙げられる.

３．図書館の在り方

現代の図書館は,大きく「貸出型図書館」と「滞在型図書館」の二つに分類できる.図書館はこれまで「本を借りる場所（貸出型)」が多く存在してきた.しかし近年では,「本を読む・学ぶ・交流する場（滞在型)」の事例が増加しつつある.このように図書館は、多様な利用者のための空間が確保され居場所としての需要が高まっている.

４．高齢者とのつながり

高齢化が進む現代において,図書館は高齢者にとって単なる本の貸出施設にとどまらず,情報提供,社会的交流,学習支援,健康促進の場としても機能し,高齢者の生活の質(QOL)の向上に貢献している.

５．児童とのつながり

児童にとっても図書館は,単なる本の貸出施設にとどまらず,「知識の入り口」や「学びの場」、さらには「遊びと創造の空間」や「社会との接点」として,重要な役割を果たしている.特に,読書習慣の形成,学習支援,情報リテラシーの向上,そして社会的交流の場として機能し,子どもの知的・情緒的発達を支えている.

１：日大理工・学部・海建　　２：日大理工・教員・海建

６．計画概要

６．１　対象敷地

対象敷地は東京都北区にある浮間ヶ池を中心にした都立の都市公園（浮間公園）とする.周辺には駅の南側に中学校,小学校などがあり,浮間公園周辺より駅の反対側に施設が集中している.浮間公園の周辺は大正時代には,工業地帯として発展してきた過去があり,1985年の埼京線浮間舟渡駅開業以降,都心へのアクセスが向上したことで,宅地化が進み,マンションや住宅が増加した.これによって浮間公園周辺は「準工業地域」に指定されており,現在も工場や倉庫などが点在している.一方で,住宅や商業施設も増え,住宅と工場が混在している状況になっている.

６．２　コンセプト

高齢者が福祉の対象にとどまらず,生きがいや社会貢献の機会を持つことは重要である.そのためには,自己の経験を語り継ぎ,地域に還元できる場（経験を語り継ぐ、新しい居場所の創造）が必要であると考える.本施設は,高齢者と子どもが交流するだけでなく,高齢者の知識や経験を次世代へ伝える「学びの場」として機能する.高齢者にとっては自身の経験が役立つ喜びを実感でき,自己肯定感を高める機会となる.子どもにとっては,学校や家庭では得られない「生きた学び」を受け取ることができる.

こうした交流を通して世代を超えたつながりが生まれ,高齢者と子育て世代が自然に支え合う,新しいコミュニティの核施設となることを目指す（Fig.1）.

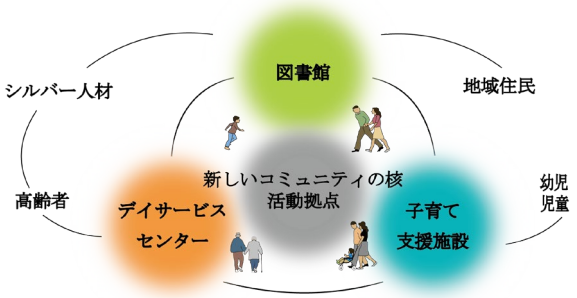

Figure.1 Conceptual Diagram for a Multi-Purpose Community Facility

７．施設概要とプログラム

子育て支援と高齢者福祉がきっかけとして地域の多世代交流が加速するような図書館を提案する.

(1) 高齢者福祉施設　デイサービス

・リビング　・キッチン　・浴室　・工房

(2) 子育て支援施設

・広場　・子育て支援室

(3) 学習エリア

・図書館　・作業室　・学習スペース

(4) 交流エリア

・交流広場　・カフェ　・ラウンジ

８．人や空間の関わり

複合化建築という多様な人が訪れる空間には,空間のつながり方が重要である.そこで Table1 に近年建設された複合化された図書館建築の各空間のつなぎ方を整理した. 低層建築物では大きな共用空間が重要な役割を持ち, 機能を持った部屋が空間に面するように配置されることで自然な交流を生み出す. 高層建築物では階層を物理的に遮断するのではなく, 吹き抜けによって上下の階段を視覚的、感覚的につないでいる, これにより異なる階にいる人々が互いの存在を感じ, 一体感が生まれる.

整理した結果、横と縦, 階ごと・空間ことの重なり・交わりを意識した設計をすることが複合施設において重要であることが把握できた. 同時に, 使用率を意識したゾーニングをすることと, 諸室同士の繋がり部分に中間領域を設けることも肝要であることがわかった.

Table.1 Analysis of Spatial Connectivity

施設	規模	空間のつながり方
A	低層	大空間の中にボックス
B	高層	7階までつながる吹き抜け
C	低層	共用通路側の活動拠点
D	高層	縦につなぐコモンズと吹き抜け
E	高層	敷地の高低差を活かした吹き抜け
F	低層	共用通路に面する腰掛
G	高層	階ごとに違う吹き抜け
H	高層	複数設けられた階段
I	高層	大部屋の間の活動室
J	高層	中央の大空間とフレックスな動線

９．参考文献

[1] 植松貞夫：『デジタル情報時代の図書館建築-その可能性と課題-』, 情報の科学と技術, 63 巻 6 号 p. 216-220, 2013

[2]湯浅俊彦：【変化する読書のカタチ・後編】貸出型から滞在型へ。図書館はまちづくり・文化創造の切り札となるか, OTEMON VIEW, 2020.06.15,

[3]日本図書館協会：『全国公共図書館研究集会 報告書』, 2018.11.30

[4]村山陽：『高齢者との交流が子どもに及ぼす影響』, 社会心理学研究, 2009 年 25 巻 1 号 p. 1-10